

電子投稿の提案

立教大学理学部化学科 成澤 芳男

電子投稿は物理や数学の分野ではすでにかなり普及しているが、最近化学の分野でも電子投稿が行われるようになってきた。従来の論文投稿は紙に印刷し、原稿を発行元にするのがふつうであるが、原稿をコンピュータのファイルとして電子メールで送る方法が電子投稿である。従って、これまでの投稿方法に比べて何段階かのクリヤしなければならない問題がある。つまりファイルを作るためのコンピュータの環境整備と、ファイルを電送するために接続するコンピュータネットワークの整備である。最近では研究者が自らワープロで論文を書くのが普通であるので、電子投稿をしようと思えばそれほど難しいことではないと思う。また最近ほどの大学でも情報ネットワークが整備されているので、後者の問題も難しい問題ではないであろう。

電子投稿のメリットは、まず論文の著者校正が簡単であり、また投稿してから印刷までに要する時間が短縮される。投稿者が正しい原稿を送ってれば、ほとんど校正の必要がない。また出版元にとっては版下作成の手間と費用の軽減というメリットがある。もう一つの重要なメリットはデータベースになるということである。それには事務局に論文を電子的に収納できる大容量のメモリーが必要であるが、実現すれば学会にとって大変便利である。また世界には5000件¹⁾を超えるFIA関連の論文リストがあり、日本にはそのうち3000件²⁾近い論文のリストがある。コンピュータ可読にしてメモリーに蓄積しておけば、利用価値は大変高いであろう。

本稿は $\text{T}_\text{E}\text{X}$ で書いた。正確には $\text{L}\text{A}\text{T}_\text{E}\text{X}$ というべきか。いずれにしても $\text{T}_\text{E}\text{X}$ の基になる文章は、市販のワープロで書くことができる。これをテキストファイルとしてセーブし、市販のエディターを使って編集することができる。 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ の書式に変換するのにある程度の基礎知識は必要となる。アスキー出版局から発売されているパーソナル日本語 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ ³⁾でコンパイルしてdvi (device independent) ファイルを作る。これが $\text{T}_\text{E}\text{X}$ で書かれた文章の出力ファイルとなる。NEC PC-98シリーズのコンピュータ用のソフトで、日本文でも英文でも $\text{T}_\text{E}\text{X}$ に変換する。コンパイラが異なると読み込みができない場合があるので、“filename.tex”という拡張子texの付いたファイルを編集元に送ることになる。このメリットは、ファイルを直接編集委員会に電子メールで送ることができる点である。この程度の式のない文章ではあまりメリットはないが、論文になると式あり、図あり、表ありでそれらがきれいに書けるのでメリットである。従って、そのような環境整備をすることが今後の課題であろう。

電子投稿の必要性は、論文誌の電子化と相まって今後一層高まっていくと思われる。それが定着するかどうかはそのメリットを投稿者が十分理解するかにかかっていると思う。

1) J. Ruzicka, "Flow Analysis VI", 8-11 June, 1994, Toledo, Spain.

2) K. Oguma, "FIA-Bibliography (22)", *J. Flow Injection Anal.*, **11** (1994) 199.

3) アスキー書籍編集部編「パーソナル日本語 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ 」アスキー出版局 (1992).